

当事者インタビューから考える生活保護世帯の子どもフェイスシート活用の
効果的な実施と障壁・課題

研究分担者 林明子（大妻女子大学）

研究要旨

本研究では、被保護世帯の子どもを対象に健康・生活状況や暮らしの困りごとを福祉事務所が把握するために本研究班で開発されたフェイスシートについて、当事者視点から活用方法や課題を検討することを目的とした。被保護世帯で育った当事者性をもつ若者をインタビューの対象者（研究参加者）として選定し、研究分担者がケースワーカー役、研究参加者が子ども役となり、実際の使用場面を想定した模擬面接を行った後、質問項目の受け止め方や話しやすさ・話しにくさ等について聞き取りを行った。さらに研究分担者と研究参加者とで役割を交代し、同様の調査を実施した。

調査の結果、フェイスシートについては「あったらよい」と肯定的に受け止められた一方で、実施方法や面談環境には慎重な配慮が必要であることが示唆された。とくに質問の仕方によっては、子どもが警戒心や不信感を抱く可能性があることが分かった。また、一問一答形式で情報を収集するのではなく、会話を重視しながら関係形成を進めることの重要性が改めて確認された。さらに、円グラフ等を活用しながら一緒に生活状況を整理する方法や、筆談・イラスト等を用いたコミュニケーション方法の必要性も示された。子どもが安心して話せる環境設定や、質問項目の順番、実施時期についても具体的な意見が得られたため、今後は本研究で得られた知見を踏まえ、実際の現場での活用についてさらに検討を進めることが求められる。

A. 研究目的

本研究班において、被保護世帯の子どもおよびその養育者の健康・生活状況や困りごとを把握し、支援を検討するためのツールとして、フェイスシートが開発されている。フェイスシートは修正デルファイ法を用いて、主に福祉事務所のケースワーカー、査察指導員、保健師等が参画して段階的に検討・作成されてきた。被保護世帯の子どもや養育者の健康・生活状況や困りごとを把握するための有効なツールとなることが期待されてきたが、質問の仕方や場面設定によっては、当事者に負担を与えるのみならず、当事者とケースワーカーとの関係性の構築に不利が生じる可能性も考えられる。これには、本フェイスシートの開発プロセスに当事者が十分に含まれていないことが挙げられる。そのため、実際の現場で活用可能なフェイスシートとするためには、当事者の視点からフェイスシートの実施方法を検討する必要がある。

そこで本研究では、被保護世帯で育った若者を対象にインタビュー調査を実施し、当事者がフェイスシートをどのように捉えるのかを明らかにすることを通じて、その有用性

や効果的な活用方法、および課題や障壁について検討することを目的とした。

B. 研究方法**1. 研究デザイン**

フェイスシートについてより詳細な考えや意見を聞き取る必要があると考え、研究分担者がこれまで研究対象としてきた被保護世帯出身の若者を対象にインタビュー調査を実施した。

研究参加者にはフェイスシートの目的や内容を説明した後、本研究の趣旨についても説明を行い、調査協力の同意を得た。インタビュー方法としては、以下の順で行うこととした。

1. 研究分担者がケースワーカー役、研究参加者が被保護世帯の子ども役となり、実際にフェイスシートを使用する場面を想定した模擬面接を行う。
2. 模擬面接後に質問の受け止め方や話しやすさ・話しにくさ、望ましい聞き方について聞き取りを行う。
3. 役割を交代し、模擬面接と聞き取りを行う。

2. 対象者

開発中のフェイスシートについて検討することから、研究分担者がこれまでインタビューを依頼したことがあり、すでに信頼関係が十分に築けていると判断される者を選定する必要があった。また子ども時代を振り返って語ることができる者が適していると考え、若者(20代後半から30代)を選定した。

本研究で対象としたのは、被保護世帯に育った若者2名(20代後半～30代前半)である。Aさんは中学生時代、被保護世帯の中高生を対象とした学習支援事業に参加していた。全日制高校進学(不登校経験あり、高卒認定試験を併用して卒業)した後、四年制大学に進学し卒業した。卒業後は就職し、20代半ばで結婚と妊娠出産を経験し、体調面を理由として退職した。BさんもAさんと同様、中学生時代に被保護世帯の中高生を対象とした学習支援事業に参加した経験をもつ。定時制高校に進学し、卒業後は専門学校に進学したものの中退した。現在はアルバイトをしながらパートナーと暮らしている。

当事者がどのようにフェイスシートや使用場面について捉えるかについて明らかにするべく、実際に想定した模擬面接とその後の聞き取りを行うため、個別のインタビュー調査を実施した。インタビュー時間は1人あたり平均1.5時間であった。

(倫理面への配慮)

本研究については、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会に申請し、承認を得た(07-041)。

C. 研究結果

インタビュー調査の結果、2名とも子ども時代にケースワーカーとの良好な関係を望んでおり、フェイスシートの活用については好意的に捉えていることが分かった。ただし「(こうした機会が)あったらいいと思う」と語られた一方で、ケースワーカーとのやりとりや面談場所については入念な検討や準備の必要であるとの意見が示された。

1. やりとりを進める上での困難さ

模擬面接後のインタビューでは、フェイスシートを用いたケースワーカーと子どものやり取りの前には、ケースワーカーのフェイ

スシート活用についての十分な理解とそれに基づく事前準備、また子どもへの事前説明が重要であるとの考えが研究参加者から強く示された。

また1日の生活状況を聞き取るパートについては、聞き取りながら表に記入していく作業が困難であることが浮かび上がった。代わりに、円グラフを24時間と見立て、1日の過ごし方をケースワーカーが聞き取り、子どもと一緒に円グラフを完成させていく方法が提案された。

さらに、一気に聞くのは困難であるため、対象となる子どもにはフェイスシートを使用しながら面談を行う趣旨を事前に説明した上で、会う回数を重ねながら、少しずつやりとりを進めることが望ましいとの意見が示された。

2. 質問項目の内容と順番について

専門家や現場の職員にとっては重要と思われる事柄であっても、子どもにとっては答えにくい内容があることが浮かび上がった。例えば、「困った時に相談できる人がいますか」という問いに対して用意している選択肢の中に「オンライン上で知り合った人」があるが、実際には相談していたとしても、大人には伝えづらく、子どもは回答を避ける可能性があることが語られた。

また「お風呂(シャワー)にはいつていますか」という問いについても、研究参加者によれば「(自分が)匂っているのが気になる」と言い、ネガティブな受け取りをされる可能性が高いことが示唆された。

さらに「おうちでほっとする場所がありますか」という問いについても、「ない」とは答えにくいと感じる可能性があるとの指摘がなされた。

そして、一般的に大人から子どもにたずねる内容として学校生活に関する事柄は違和感がないため、質問する順番としては学校生活に関する内容から聞き始め、その後に体調面や家庭生活面へと進む方が子どもは答えやすいのではないかという意見が示された。

3. 話しやすい聞き取り方法について

子どもが安心して話せるためには、質問の方法や表現、環境面の工夫が重要であることも浮かび上がった。子どもの年齢や発達段階、特性、またケースワーカーとの関係性によっ

ては、円滑なやりとりが難しい場合も考えられる。研究参加者からは、イラストを用いたやりとりや筆談などの工夫が必要となる可能性が指摘された。

また地域の学習支援や生活支援、子ども食堂、図書館、奨学金の情報など、子どもが利用可能な支援サービスについて情報をまとめてから、面談に臨むことにより、会話のきっかけが作りやすくなることも提案された。

4. 面談をする環境への配慮

子どもは保護者の存在を気にして回答することが考えられるため、可能であれば子どものみの空間で回答してもらうように環境を設定することが望ましいという意見が出された。一方で、完全に切り離された空間よりも、保護者の声が適度に聞こえる環境の方が安心して話せる場合もあることが語られた。これは、保護者自身も別の場所でケースワーカーと話している状況であれば、「自分の話は聞かれていない」と子どもが確認できるからである。

また実施時期については、夏休みの前後が望ましいという意見が得られた。学校がない時期は家庭に籠ってしまい、しんどくなるケースが考えられるため、誰かに話したくなる子どもが増える可能性が考えられるという。加えて、夏休みであれば、平日の日中に子どもに会える可能性が高まることが期待できる。

D. 考察

本研究では、被保護世帯で育った若者を対象としてフェイスシートに対するインタビュー調査を実施し、その有用性や効果的な活用方法、および課題や障壁について当事者目線で検討することを目的とした。模擬面接を行った上で、インタビュー調査をした結果、支援者側の意図と、子どもの受け止め方との間にずれが生じる可能性が考えられた。全国の福祉事務所で標準的に活用できることを想定したフェイスシートであるため、質問は簡潔になっている。子どもとのやり取りを重視しながら進めることを想定しているものの、フェイスシート活用に関する理解が十分ではない場合には、事務的な質問を淡々と子どもに行ってしまう可能性が考えられた。一問一答で単に情報を収集するのではなく、会

話を重視し、やり取りを重ねながら、子どものことを理解していく関わり方を意識することにより、子どもの警戒心や不信も薄らぎ、フェイスシートを効果的に活用することができるだろう。

研究参加者からは質問項目の内容だけではなく、実施方法や事前準備について具体的な意見やアイデアが出された。1日の生活状況を聞き取るパートについては、研究参加者が提案するように円グラフを用いて可視化しながら確認していく方法が双方にとって進めやすく視覚的にも理解しやすいだろう。ケースワーカーと子どもが面と向かい、質問と回答を繰り返す形式では、やりとりが円滑に進まない可能性も考えられる。そのため、シートを用いて一緒に整理しながらやり取りを進めていく方が、心理的負担の軽減や円滑な対話につながる可能性がある。とくに不登校の児童生徒の中には、支援者と直接目を合わせて話すことに強い緊張や抵抗を感じる者もいるだろう。そのため、ツールを介してやり取りを進められる点には、大きな意義があると考えられる。

またフェイスシートについても子どもが答えづらいと感じる内容や表現は極力避け、双方にとって負担の少ないフェイスシートの活用方法を検討する必要があるだろう。例えば「お風呂（シャワー）にはいついますか」という質問は、項目としてはそのままにしておき、実際のやりとりでは「お風呂に入るのは好きですか」や「お風呂に入る時間は決まっていますか」など臨機応変に対応することが望ましい場合もあるだろう。同様に、「おうちでほっとする場所がありますか」という質問も、項目としてはそのままにしておき、子どもの年齢や状況に合わせて「おうちでリラックスできる場所はどこですか」や「何をして過ごすのが好きですか」などのやり取りを重ね、子どもの状況を多面的に理解していくことが必要であると考えられる。

子どもが安心して話せる時期や環境をどのように設定するのかについても、十分に検討される必要があることが確かめられた。例えば、家庭訪問時にはケースワーカーが複数名で訪問し、保護者対応をする者と子どもへの聞き取りをする者とで役割を分担することが考えられるが、ケースワーカーの負担増加とならないよう慎重にシミュレーションを行うことが求められる。

E. 結論

本研究では、被保護世帯で育った若者を対象にインタビュー調査を実施し、フェイスシートの活用について当事者視点から検討を行った。その結果、フェイスシートは、子どもの状況や困り感を把握するための有効なツールとして期待される一方で、質問項目の内容や聞き方、面談環境によっては、子どもに負担感や警戒感を与え、フェイスシートが効果的に活用されない可能性があることが示唆された。また、フェイスシートを単なる情報収集のためのツールとして運用するのではなく、子どもとの関係形成を支える媒介として位置づけることの重要性が確かめられた。とくに、会話を重視したやりとり、視覚的ツールを活用した支援、安心して話せる環境設定、子どもの心理的負担に配慮した質問の順番などが、円滑な面談を行う上で重要であると考えられた。今後は、本研究で得られた知見を踏まえ、フェイスシートの実用に向けてさらなる分析や検討が求められる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし